

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2023年3月1日発行
発行者 本多 弘之
編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)
〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901
e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>
Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>
Twitter https://twitter.com/shinran_bc

2023.3
第84号

みてこさる

親鸞仏教センター研究員 宮部 峻

小学一年生のときに、父の都合で入寺して以来、「お寺の子」になったが、家の中では真宗との強い接点があったわけではない。通塾したり、遠くの学校に通ったりしたこともあり、一日の多くはお寺の外で過ごしていたからであろう。私のこれまでの人生経歴を省みれば、およそ宗教的なものとは対極にあると言ってもよい「偏差値至上主義」に毒されている。頭でっかちの悪しき俗物とはこのことであろう。そんな私にとって、真宗は、祖父との思い出と強く結びついている。そう、私は、生まれながらにして「お寺の孫」であった。

祖父は、仕事の場では大変厳しい人であったらしいが、孫の私にはお茶目どきに破天荒な側面を見せてくれていた。滋賀のお寺で抹茶を立て、よもぎをとって草餅をつき、鱒を捌き、木に登って梅を取ってくれたり、祖父は器用になんでもやってくれた。そんな祖父に魅了された私は生粋のおじいちゃん子であり、幼いころは祖父のような僧侶になりたいと思っていた。

滋賀のお寺には、「みてこさる」という言葉が書かれた碑があった。幼き日の私は祖父にこれはどういう意味なのかと尋ねた。祖父は、「宮部えん円成じょうさんの言葉でどんなときも仏さんが見てくれて

いるということや。『仏さんがみてござる』や」と教えてくれた。今から振り返ると、これは節談説教で布教を生業としていた円成さんが「南無阿弥陀仏」の六字をひらがなの五文字に平易に言い換えた言葉なのだろうと思う。それ以来、私は折に触れてこの言葉を思い返して振る舞うようになった。失敗も数え切れないほどしてきたし、間違った行動もしてきたが、それもきっと見てくれているのであろうと思いつつ。

祖父との思い出を今から振り返ると、祖父の人柄にも、間違いなくこうした浄土真宗の生活倫理が現れていたと私は思うのだ。そして、その人柄に接した私は、祖父のように厳格に生きながら、ときには冗談を言いながら緊張を緩和し、人を楽しませるようなゆとりをもちたいと思うようになった。私にとっての真宗とは「みてこさる」で、その精神に生きる人が僧侶だ。

大学進学で上京した当初、お寺との接点はますます薄くなるのだろうかと思っていた。不思議なご縁でありがたいことに親鸞仏教センターの研究員をしている。きっと、祖父は今の私にこう言うであろう。「みてこさる」と。

究極的関心

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第134回から137回が、親鸞仏教センターに於て、対面講義、及びオンライン配信のハイブリット形式で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、質疑応答がなされた。ここでは、その第135回から一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

『大無量寿経』に、『真宗聖典』(東本願寺出版)で言いますと83頁に、「仏智を疑惑するをもってのゆえに、かの宮殿くでんに生まれて」、そしてその少しあとに「もしこの衆生、その本の罪もとを識りて深く自ら悔責けしやくしてかの処ところを離れんと求めば」とあります。親鸞聖人が『教行信証』の化身土の巻で引かれているところです。

光の世界の中に、快樂に埋没するというような在り方をしてしまった場合には、五百年という年月を、仏法を聞くという生活からすると無駄に過ごしてしまうと言われる。楽しみを、快樂を人生の目的とするならば、五百年も楽しい世界にいられるということは価値があるとも言えるわけですが、それは結局、有限の世界に囚われて、有限の楽しみに埋没する。究極的目的がわからない。

ティリッヒ (Paul Tillich 1886-1965) という方が、アルティメット・コンサーン (ultimate concern) ということを言うのですが、究極的関心のことです。「究極的」ということは、人間が感じたり、考えたり、求めたりする、相対的意味や価値、楽しみとかではない。究極的なるものに気づく、目覚めるということですが、なかなか目覚める因縁に恵まれるのは難しい。けれども聞法関心に出会うということは、結局、この究極的関心に触れるということなのです。相対的価値に満

足するというのは、この世の意味、人間として有限の命の意味を有限に意味づける。人と比較したり、自分の意味というものをこの世の有限の形の中に意味づけたりしようとする。そういう営みなのですけれど、それは結局、自我、自分ということに囚われて、自分の相対的な意味づけに走ってしまう。そういうことは人間にとってある意味で虚しい。相対的に何かこの世で自分にはこういう体験があったとか、こういう価値を生み出したのだとかということで、自分を意味づけようとすることの虚しさ、そういう思いが湧いてくる。

だから、そういう思いを越えて、本当に満足できるものは何だと、こう問い直したときに、「本の罪を識りて深く自ら悔責して」ということがある。我々は如来の智慧を疑惑している。大悲の智慧は、有限の知恵に対して、何か頼りないと言いますか、我々からするとよくわからない。この自分に執着する、自分の有限なる因縁に執着する。しかしそういう形だけでは存在の真の意味、究極的な意味は満たされない。なかなか難しい問題ですけれども、そうした意味に目覚めるのが、本願の教えだと。本願の教えに出会うということは、無限なる大悲に出会うということ。有限なる因縁をお願いするのではない。不可称不可説不可思議と、こう言われているように、我々からはまったく説くこともできない、考えることもできないような大きなはたらきを信ずる。無限なる大悲というものを頼まずにおれなという心が起こってくるということは、そこに無限の意味、つまりこの世を超えた意味がある。本当にこの世の有限性を超えたようなものを願わずにおれない。そういうものが要求されるということなのだと思います。



『精神界』誌上にも 「浩々洞註」という名のり

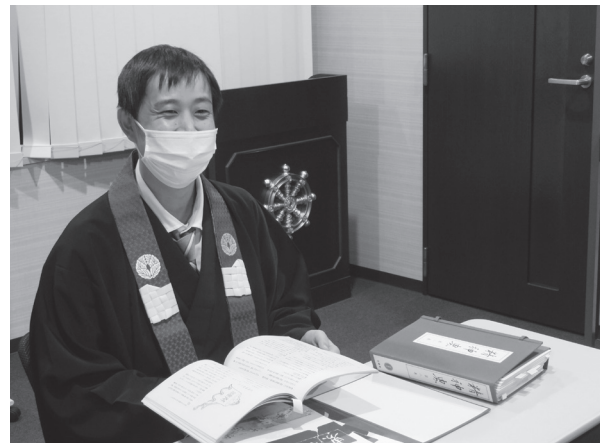
親鸞仏教センター研究員 谷釜 智洋

第7期清沢満之研究会では、雑誌『精神界』を通じて浩々洞同人等による様々な活動に迫ってきた。2022年12月現在、創刊号（明治34〔1901〕年）から第2巻第12号（明治35〔1902〕年）までの期間、「浩々洞註」という記名のもと誌上に掲げられた諸論稿に着目し、その読解を中心に進行している。ここでは「浩々洞註」という記名が『精神界』誌上において、いかなる位置づけをもつものであったのか。その一端について報告する。

周知の通り、浩々洞は東京市本郷区森川町に在住していた清沢満之（1863-1903）のもとに集った青年らと共同生活をしたことに始まる。浩々洞から発行された雑誌『精神界』は、明治34（1901）年1月から大正8（1919）年2月まで継続した月刊誌であり、清沢を中心とした「精神主義」運動が展開された雑誌として知られる。清沢は明治34（1901）年10月、東京の巣鴨に移転開学された真宗大学（現・大谷大学）の学監に就くが、翌年10月にその職を辞し、翌月には療養のため浩々洞を離れ大浜（愛知県）の自坊・西方寺に帰った。

『精神界』誌上に掲げられた「浩々洞註」という記名は、『精神界』の「解釈」欄（経文などの文献を解釈したコーナー）に掲げられたものである。「浩々洞註」という記名は、『精神界』創刊号から第2巻第12号までの期間（計24回）しか用いられていない極めて特殊な記名である。個人名ではなく「浩々洞註」という共同体名の表記を使うことで、個人の見解に偏らないように配慮したものでないかと推察される。

「浩々洞註」という名のもとの著された諸論稿は、『精神界』巻頭の「精神界」欄冒頭に掲げられたエピグラフ（題句）と対応関係にある。エピグラフには、創刊号から第2巻第12号まで、もっぱら経典（「浄土三部経」を中心とした大乘経典）



の文言のみが選定されているのだが、この経典の文言が「解釈」欄にて「浩々洞註」というように、浩々洞全体で文責を担う形で註釈されるという誌面上の構成となっている。

『精神界』創刊号から第2巻第12号までの「解釈」欄には、性格を異にする二つの論稿が掲載される。一つは、浩々洞同人の個人の記名によって仏教にかかわる特定の主題について論述していくものである。もう一つがエピグラフに引用された経典の文言に「浩々洞註」の記名によって註釈を加えていくものである。上記の期間において、前者の論稿は掲載されない号もみられるが、後者の論稿は一回も欠かすことなく掲載されている。つまり第2巻第12号までの『精神界』という雑誌において、経典の文言を註釈するという方針が重視されていたと考えることもできるのである。

上記の通り清沢は、明治35（1902）年11月に離洞しているが、「浩々洞註」という記名は、清沢が浩々洞を去るとほぼ同時に誌上に現れなくなるのである。エピグラフは『精神界』第3巻第1号（明治36〔1903〕年）以降も継続し、第8巻第12号（明治41〔1908〕年）まで誌上に掲げられるが、経典の文言のみならず様々な文献の文言も採用されるようになる。しかも、第3巻以降の『精神界』では、エピグラフを「解釈」欄にて註釈するという活動はみられなくなる。

以上のような「浩々洞註」という記名のもとおこなわれた経典の文言を註釈するという試みが、いかなる時代潮流の中で取り組まれたものであったのか。この活動が当時の仏教界において、いかなる意義を有するものであったのか。さらに他の仏教系雑誌に上記のような試みはあるのか、比較検討すべき多くの課題も残されている。

近現代『教行信証』研究

検証プロジェクト

真宗教学史における 慶秀の位置と教学理解

伊藤 顕慈 氏（龍谷大学文学部実習助手）

2022年9月5日、龍谷大学文学部実習助手の伊藤顕慈氏をお招きし、「真宗教学史における慶秀の位置と教学理解」というテーマのもと、研究会を開催した。

慶秀は、教如のもとで堂衆を務めた人物であり、「正信偈」や和讃などの註釈書を著わし、近世真宗教学の先駆となった学僧である。しかし、現今の大谷派では慶秀の教学のみならず、近世宗学史の研究全般が十分でなく、特に本願寺派宗学との影響関係については、未だ手つかずと言ってよい状態にある。そこで、本願寺派の研究者であり、慶秀の教学理解に精通している伊藤顕慈氏をお招きし、問題提起をいただいた。ここに、その一端を報告する。（親鸞仏教センター嘱託研究員 青柳 英司）

◆はじめに

慶秀は永禄元年（1558）3月1日に生まれ、15歳の時に顕如の下で得度しました。その後、顕如の長子・教如の下で堂衆に列し、慶長十四年（1609）に52歳で示寂しております。ですから慶秀は、戦国期から江戸期を生きた学匠ということになります。著作も多く、『正信念仏偈私記』や『三帖和讃私記』、『安心決定鈔私記』などが刊行され、伝存しております。

慶秀の以前にも、覚如や存覚、蓮如といった方々の著作はありましたが、慶秀は末寺の一僧侶になります。こうした僧侶が著作を残すことは慶秀に始まることで、近世における宗学研鑽の草分け的存在であったと言えます。

◆如来論

慶秀の如来論の特色としては、法界身義を基盤にしているという点が指摘できます。『観無量寿経』に「諸仏如来はこれ法界の身なり」とありますが、この記述を背景にして、法身というものを



考えているのです。そして慶秀は、「法界」には事と理の二種があり、理法界は三身（法身・報身・応化身）の中の法身であって、諸仏と異なるものではなく、あらゆるところに遍満しているのだと理解しています。

◆衆生論

次に衆生論ですが、今回は仏性論に焦点を当ててお話しします。結論から言えば慶秀は、衆生には本来仏性が具わっているとする立場、いわゆる「本具仏性」の立場にあります。その仏性とは何かと言いますと、阿弥陀仏が正覚を得る刹那に成就した、衆生往生の願行です。ですが、衆生は自力に執着しているため、その願行の功德は顕現しないのだと、慶秀は述べています。この願行の功德は、如来の回向によって衆生に与えられるものですから、慶秀の「本具仏性」説は、如来回向の成就を前提に語られているものだと考えられます。

◆回向論

そこで次に回向論ですが、慶秀の主眼は回向の主体にあります。行者の回向ではなく如来の回向であるということが、繰り返し確認されます。また如来が回向するのは名号である、回向の「ものながら」は名号であると、慶秀は明確に述べています。『正像末和讃私記』には、

この名号の功德真如をもって体とす。この理
広大にして所として遍せざるこなきが故に
「十方にみちたまふ」といふなり。（41丁右-左）

とありまして、名号の「体」は真如であり、それはあらゆるところに遍満しているのだとされています。先ほどの法界身理解に通じるものが、ここ

に見出されます。回向の「ものから」は名号であり、名号は遍満すると理解されていますので、回向の位置づけも遍満にあると考えられていることになります。つまり慶秀は、獲信の有無に関わらないところで、回向や名号、仏性を語っていることになります。

◆行信論

まず、往因（往生の因）に対する理解から見ていきたいと思えます。『安心決定鈔私記』には、次のようにあります。

本来所具の正因仏性内に薫じ、弥陀の願力外に加するが故に終に皆回心すべきなり。（本・16丁右-左）

ここでは仏性と願力が、内外の関係で語られています。内なる仏性と、外からの阿弥陀仏の願力とによって、回心が成り立つのだと。では、この願力とは何でしょうか。『浄土和讃私記』によりますと、これは第十八願の本願力であり、この願力によって信心が発起するのだとされています。また、その信心は心行不離であり、慶秀は称名と信心を、それぞれ第十七願と第十八願とに配当しています。慶秀は、名号を称えたから往生できる、という立場は否定しているのですが、第十七願として衆生の称名を語っているという点は、押さえておきたいと思えます。衆生の往因は信心なのですが、慶秀はその信心に心行不離、ひいては心行具足を語っています。つまり、往因としての信心に第十七願の称名がすでに入っているということになります。

では、なぜ信心に称名が混ざってくるのでしょうか。先に示しましたように、慶秀は名号の「体」が真如であると考えています。ですから、名号は無為無漏であり、凡夫の称名も無為無漏であるとするのが、慶秀の理解になります。そして『安心決定鈔私記』には、

心に領解するは仏体の功德、口に唱るはすなはちその名、しかるに名体不二なる故に心念口称みなこれ一なりといふなり。（末・一九丁右）

とあります。「心に領解するは仏体の功德」であり、名号の功德の体も真如（仏体）です。ですから、信心と称名は不離であり、往生の因であると理解されるのです。慶秀は、信心と称名が離れた自力の念仏では、化土に生まれることになると述べています。体と不二の関係にある名（行体）でなければならないのです。

つまり、慶秀の往因理解は、内なる本来所具の仏性に、外から名体不二の名号が本願力として加わり、第十八願の信心が発起します。この信心は心行不離のため、第十七願の称名をそなえており、心行具足の行者の称名に名体不二の体（仏体）を現するという構造にあると言えます。

◆まとめ

慶秀は法界身をもって阿弥陀仏を捉え、その回向の成就として仏性を語っています。その回向の「ものから」は名体不二の名号であり、その名号は衆生の念仏と「即」の関係にあると慶秀は理解しています。その名号に対する立信も、称名念仏になる名号への立信という立場になります。ですから、慶秀の教学における名号は、やはり衆生が称えるものという位置づけにあるかと思えます。これは、三業惑乱を経た現代の本願寺派教学では、問題視される点になります。

また、慶秀の教学における本具仏性を認める点などは、本願寺派の初期能化時代の学匠である西吟や知空、若霖にも通じるものです。ですから慶秀は、近世真宗教学の基盤を形作った学匠として、位置づけることができると考えます。

本研究会は、青柳英司を研究代表者とするJSPS科研費20K12810による研究の一部として、開催されたものである。



《語註》

聖覚…一六七―一二三五。吉水の法然を師として仰いだ天台宗の学僧。親鸞が生涯にわたって信頼した先学。法然の『選択本願念仏集』を基礎に『唯信鈔』を著した。親鸞は自ら、それを繰り返し書写し、関東の門弟に送り、拜読するように勧めた。また親鸞は、聖覚が『唯信鈔』のなかに引用する要文（漢文）の意を解説した『唯信鈔文意』を著している。

法印聖覚和尚の銘文…この聖覚の讚銘文は、聖覚が記し述べた表白文の抜粋である。その表白文全体については、親鸞による書写本（『聖覚法印表白文』）が現存している。それは、法然の命終後、六七日（四十二日）の法要の際に、聖覚が導師をつとめ、師・法然の恩徳を讃えたものであると見られている。

現代語化をめぐって

末巻の第四番目は、親鸞の信頼した先学・聖覚に関する銘文である。親鸞が、聖覚より受け継ぎ深めた思想的課題の一つは、教相判釈であると思われる。親鸞はこの銘文で、仏陀釈尊の教説を、「聖道門・難行・自力」と「浄土門・易行・他力」とに分け、さらに、「漸教」（ゆっくりと、段階的にささる教え）と「頓教」（ただちに、一挙にささる教え）とに大きく分類して、仏の本意を明らかにしようとしている。

原文のはじめに「衆生の根性」という言葉がある。仏が呼びかける対象は、あくまでも衆生である。しかし仏の教化については、具体的に自己自身が、一人の人間としてそれを受けるところに始まる。「根性」とは、その人が生まれ持つ心・素質のようなものであろう。その「根」に応じて、仏に成る教え、「教」に種類があるという。「根」

の「鈍」の人には漸教、「根」の「利」の人には頓教が対応していると思われる。そこまでは聖道門に関する問題である。

一方で、「機」という、仏の教えを受けてはたらく心を持つ者という着眼点がある。その「機」と「行」が対応関係になっている。「機」の「善」には難行、「機」の「促」には易行が対応していると思われる。そこは聖道門と浄土門の対比という問題になっている。

ただ、ここで聖道門、浄土門と言っても、自分の外側にそういう二種類の仏道を歩む人間がいるという話ではないだろう。それは、自己の依り所とする教え・立場が聖道門・自力であるのか、浄土門・他力であるのかという選びの問題である。法然、聖覚、そして親鸞自身がそうであったように、一人の人間の歩みの内実である、と

ということである。「浄土一宗者」とは、浄土宗は頓教（ただちに、一挙にさとりを得るといふ教え）である。また易行であると知っておくべきだということである。「所謂真言・止観之行」とは、真言は密教の行であり、止観は法華（天台）の行である。「獼猴情難学」とは、この世に生きる人の心を猿の心にとえているのである。猿の心のように、落ち着きがなく定まらないうちというのである。こういうわけで、真言や法華（天台）の教えに基づく行は修めがたく、行じがたいというのである。「三論法相之教牛羊眼易迷」とは、この世で仏法を学ぶ人間の眼を、牛や羊の眼にとえていっている。三論や法相など、聖道門の自力による教えについては、混乱し方向を見失うにちがいないと、おっしゃっているのである。

了解することができるのではないかと。

親鸞は自分の身に引き当てて、この現実世界で仏道を志す者が、聖道門の教え・難行に関わると、及び難いものになると言っている。そういう我が身の苦悩を、猿、牛、羊という動物の譬えによって、表現しているように思われる。その中であって、注目すべき「機」の「促」とは、速やかにまよいの苦悩を離れ出て、切実にさとりを求める心を持つ者、ということなのだろう。仏道に及び難い身を実感しつつ、尚、その身を引き受けて、まっとうしようとする心を持つ者が、浄土門・易行へと向かっていく。そのように言えるのではないだろうか。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 菊池 弘宣）

【原文】

法印聖覚和尚の銘文

「夫根有利鈍者 教有漸頓。機有奢促者 行有難易。当知聖道諸門漸教也 又難行也。浄土二宗者頓教也 又易行也。所謂真言止觀之行 獼猴情難学。三論法相之教 牛羊眼易迷。（後略）」

「夫根有利鈍者」というのは、それ衆生の根性に利鈍ありとなり。利というは、このころのとき人なり。鈍というは、このころのにぶき人なり。「教有漸頓」というのは、衆生の根性にしたがうて仏教に漸頓ありとなり。漸は、ようやく仏道を修して、三祇・百大劫をへて仏になるなり。頓は、この娑婆世界にして、このみにてたちまちに仏になるともいうなり。これすなわち仏心・真言・法華・華嚴等のさとりをひらくなり。「機有奢促者」というのは、機に奢促あり。奢はおそきところなるものあり。促はときところなるものあり。このゆえに「行有難易」というのは、行につきて難あり、易ありとなり。難は聖道門、自力の行なり。易は浄土門、他力の行なり。「当知聖道諸門漸教也」というのは、すなわち難行なり、また漸教なりとするべしとなり。「浄土二宗者」というのは、頓教なり。また易行なりとするべしとなり。「所謂真言・止觀之行」というのは、真言は密教なり、止觀は法華なり。「獼猴情難学」というのは、この世の人のこのころをさるのころにたとえたるなり。さるのこのころのごとくさだまらずとなり。このゆえに真言・法華の行は修しがたく行じがたしとなり。「三論法相之教牛羊眼易迷」というのは、この世の仏法者のまなこを、うし、ひつじのまなこにたとえて、三論・法相宗等の聖道自力の教にはまどうべしとたまえるなり。

【現代語】

法印聖覚和尚の銘文

「夫根有利鈍者 教有漸頓。機有奢促者 行有難易。当知聖道諸門漸教也 又難行也。浄土二宗者頓教也 又易行也。所謂真言止觀之行 獼猴情難学。三論法相之教 牛羊眼易迷。（後略）」

「夫根有利鈍者」とは、まず、仏の教化を受けるものの素質に「利」と「鈍」とがあるというのである。「利」とは、その心が鋭い人のことである。「鈍」とは、その心が鈍い人のことである。「教有漸頓」とは、仏の教化を受けるものの素質に順って、仏陀の説く教えに「漸」と「頓」とがあるということである。「漸」は、段々と仏道を修め、三阿僧祇・百大劫というはかり知れないほどの長い時間を経て仏に成るのである。「頓」は、この苦悩の多い現実世界において、我が身のままで即座に仏に成るといのである。これがすなわち、仏心（禪）・真言・法華（天台）・華嚴などの教えによってさとりを開くということである。「機有奢促者」とは、仏の教化を受けてはたらく心を持つ者に「奢」と「促」とがある。「奢」は、ゆるやかにはたらく心を持つ者である。「促」は、速やかにはたらく心を持つ者である。これによって、「行有難易」とは、行について、「難」（行じがたいもの）があり、「易」（行じやすいもの）があるというのである。「難」は聖道門であり、自力による行（自分の身や能力を信頼して励む行）のことである。「易」は浄土門であり、他力による行（阿弥陀如来の本願のはたらくに基づく行）のことである。「当知聖道諸門漸教也」とは、聖道門はすなわち難行であり、また漸教（長い時間をかけて、段階的にさとりに至るとい教え）であると知っておくべきだ

「近現代の真宗をめぐる人々」第19回 （江村秀山[1845-1903]）

「明治十三年頃、東京に於て、寺田福寿氏や江村秀山氏の諸師が、社会に向つて仏教を紹介したのは、仏教の社会化の初めである。其の次に井上円了博士が、『仏教序論』〔ママ〕や『仏教活論』を著したのは、仏教の哲学化の初めである。其次に清沢満之師が『精神界』を出したのは、仏教の人生化の初めである」（安藤州一『開導新聞の発行』『現代仏教』第105号）と書いたのは、浩々洞門下の安藤州一である。

井上円了や清沢満之に先立ち、東京で仏教を社会に向けて開いていくような活動をしていたのが、寺田福寿や江村秀山といった大谷派の仏者たちであった。以前このコーナーで紹介した寺田と並べられている江村は佐渡の生まれで、京都に出て学僧となり、寺田と同様に大谷派の給費生として東京慶應義塾で学んだ人物だ。そしてそこでの学びを活かし、明治13（1880）年7月に東京を拠点として『開導新聞』を発行する。これは大谷派の機関紙であったが、新たな西洋の学説の紹介なども積極的に行っていた。明治期には東京を中心に大谷派の仏者たちが仏教の近代化に向けて様々な活躍を見せていたが、その端緒を開いた江村秀山のような人物も私たちの記憶に留めておくべきだろう。（長谷川 琢哉）

親鸞仏教センターの動き

（2022年11月～2023年1月―抄出―）

12月から2022年度「親鸞仏教センター研究員と学が公開講座」が開講した。共通テーマを「交差する世界——浄土と穢土」とし、各講座が行われた。各講座の題目は、加来雄之・中村玲太・青柳英司「往生とは何か」（各1回、全3回）、谷釜智洋「浩々洞における浄土——「共同体」による経文解釈に着目して」（全3回）、宮部峻「社会学と親鸞——浄土の論じ方」（全3回）であった。

お知らせ

■講座のご案内

定例講座「『歎異抄』思想の解明」（講師：加来雄之主任研究員）が3月より再開いたします。3月15日（水）、4月19日（水）、5月17日（水）の開催を予定しておりますので、ぜひご参加ください。【時間：19：30-21：00 参加費無料 オンライン・会場聴講のハイブリッド形式】

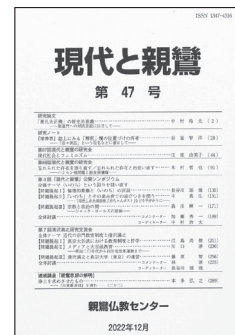
お申込みはこちらから：

http://www.shinran-bc.higashihonganji.or.jp/teirei_kaku/



■出版情報

- 研究誌『現代と親鸞』第47号
（2022年12月発刊）



- 雑誌『アンジャリ』第42号
（2022年12月発刊）

